ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ　～異世界から来た魔導士～

hayate

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ　～異世界から来た魔導士～

【Ｎコード】

Ｎ２０７４Ｎ

【作者名】

ｈａｙａｔｅ

【あらすじ】

ＦＡＩＬＹ　ＴＡＩＬの二次創作です。魔法先生ネギまの世界から来たオリ主ががんばる話です。適当ですみません（汗）。とりあえず不定期ですが、よろしくおねがいします。

プロローグ

「あーっと……後はこれをこうして……だぁ～わかんねぇ！」

いきなりでなんなんだが、俺の名前はリン・クルーダス。よく女と間違われるが、実際は男だ。

で、これまたいきなりでなんなんだが、俺は魔法使いだ。それも、それこそ知らないものはいないような、大魔法使い。

そんな偉大な俺が今現在何をしているかというと、自分の研究室で新魔法の研究を行っていた。

「この魔法が完成すれば、相当凄い魔法になる……はず！」

俺が今考案中の魔法は、いろんな意味で世間を沸かせるだろう。ゆえにこそ、俺はこの魔法の完成を急がなければならなかった。

「後一歩のところまできてんだけど……こっからがなぁ。式がごちゃごちゃしててよくわかんねぇし、ちょっと間違えればまったく違う魔法になっちまいそうだし……」

紙に魔法式を書いて、ひたすらそれを考える。だけど、最後の最後のところがわからなくて、今だ完成にはいたっていない。

……もうこれはいっそ、

「……一度このまま使ってみるか？」

案外、いい考えかもしれない。このまま何もできずに手をこまねいているよりは、たとえ失敗したとしても、実験してみたほうがよ

さそうだ。

「――よっし！　んじゃあ、いっぺんやってみっか！」

決意して、未完成の呪文を唱え始める。ほどなくしてその詠唱は終わり、俺は最後の呪文を叫んだ。

さぁ――どうなる！

「……」

……って、なんも起きない？

はぁ。だよなぁ……未完成なのに試してもなにも起こるわけ――

「……ん？」

落胆しかけたとき、自分の魔力がどんどん消え去っていくがわかった。それと同時に、目の前に小さな光の球が現れ、見る間に巨大になっていく。

な、なんだなんだ？！　一体、何が起こってるんだよ！？

「あ……や、べ……もう立ってられな……」

もしかしたら世界一かも知れないと思っていた俺の魔力は、既に底をつきかけていた。そして、俺の意識もだんだんと薄れていき、がくりと膝をつく。

なのに無情にも魔力の減少は止まらず、加えて光の球体はどんどん大きくなっていく。

――俺、このまま死ぬのか……？

そう思ったとき、光の球が俺を覆いつくし――

――そこで、俺の意識は途切れた。

＊　＊　＊

「ん……んあ？」

ここは……どこだ？

次に俺が目を覚ました時、俺は知らない街中につったっていた。

いや、街どころか、言語まで違う。ここは、俺がいた国とは違うのか……？

とりあえずは……言葉が通じるようにしねぇとな。

「『流れいづる風の精、音を司りしその力にて、我らが意志を他者へ伝えよ――言霊繰（く）り』」

……よし。これでなんとか、言葉はわかるようになった。

俺はさっそくここがどこなのかを知るべく、近くにいたオッサンに話し掛けた。

「なあ、あんた。ちょっと悪いんだけどさ、ここってどこ？」

「どこって……ここはハルジオンの街だけど……」

「ハルジオン？」

やっぱり、聞いたことはない。

「んじゃあ、この国は？　ハルジオンってのは、どこの国なんだ？」
「君、一体どうしたんだい？　そんなもの、フィオーレ王国にきまっているだろう？」
フィオーレ王国……。だめだ、完全に聞き覚えがない。
というわけで、結論。ここは俺の国でもなければ、俺が知ってる国でもない。
「ああ、悪かったな、ありがとう。ちょっと俺記憶喪失なんだ。じゃあな」
「今さらっと大変なこと言わなかったかい？！」
オッサンに別れを告げ、適当に街中を歩く。それから、少し考えてみることにした。
あの未完成の魔法……もしかして、転移魔法になっちまったのかな？　まあ、なにがおきてもおかしくないと思ってたけど。
それから、もう一つ……、
「魔力、すげぇ減ってるな……」
なぜかは知らないが、俺の魔力は本来よりも大分減っていた、それでも一般から見たらたいしたものなのだが、ショックだ。
「……ま、いっか」
考えてもしかたない。だったら、考えない。この実に単純かつ明快な理念に則って、俺はさっぱりと諦めた。

そしてなおも歩を進めていると、黄色い声が上がった。

『きゃ～火竜（サラマンダー）様～！』

見てみると、視線の先には女ばかりで構成された人だかりができていた。

火竜（サラマンダー）って……なんかのあだ名だろうか？

「……おもしろそうだな。行ってみるか」

どうせ暇だしな、と続けて、その集団に向かって歩き始めた。

＊　＊　＊

――さて。

ここから、俺の物語は始まることになる。

魔法使いとして。そして、『妖精の尻尾（フェアリーテイル）』の魔導士して。

物語が、始まるのだ――

プロローグ（後書き）

いきなり、魔法がオリジナルです。ネギまにした意味が無い（汗）

設定（前書き）

簡単な設定です

設定

名前　リン・クルーダス

年齢　１８歳

身長　１７５ｃｍ

髪の色　銀

瞳の色　碧眼

容姿　上の中

戦闘能力　・ネギまの世界に登場する魔法
　・体術
　・剣術
　・影を使った収納術
　以下、随時追加予定

性格　基本、おもしろければなんでもいいと思っている。本人にその気はないが、仲間思いで、意外に修行好きだったりする

備考　ネギまの世界で言う、魔法世界（ムンドゥス・マギクス）でも指折りの魔法使い。早い話が、超手練。しかし少し抜けているところがあり、開発中の新魔法が暴発してＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬの世界へ飛ぶことになる。

第一話　火竜と羽猫と美少女と（前書き）

今回は、原作第一話を書いてみました。というか、前回の続きから考えると当然こうなるんですが（汗）

第一話　火竜と羽猫と美少女と

――ハルジオンの街　街路――

人垣を掻き分けて進むのが面倒なので、周りに立って女たちの話を聞いていると、どうやら『火竜（サラマンダー）』というのは、有名な魔導士（魔法使いじゃないのか？）らしい。

――さて、ここで俺はおかしなことに気付いた。

俺がいた国……というよりも、世界中で魔法は秘匿の対象にあったはずだ。なのに、ここでは普通に魔法の存在が周知になっている。

これはありえないはずなんだが……もしかしたら、俺が知らないだけで、そういう国もあるのかもしれない。

というわけで、俺は次にその『火竜』とかいう男に興味を持った。なので、今度は人垣を掻き分け、前に進む。やがて大仰なマントをつけた青髪のオッサンを発見した。

なんでこんな男があんなにキャーキャー言われてんだ？　偉大な魔法使いってんなら、ナギの方がよっぽどかっこいいのに。

ちょっとばかりイラッと来た俺は、とりあえず挑発してみることにした。

「テメェが火竜かゴラァ！」

「「イグニール！」」

……ん？

俺の声と重なるように二つ声が聞こえたので、そちらを見ると、鱗みたいなマフラーをした桜色の髪の男と二足歩行している青い猫

がいた。
誰だ、こいつら……？
俺が見ているのに気付いたのか、向こうもこちらを見返してくる。
「よぉ、俺はリン。お前らは？」
「んぁ？　オレは、ナツだっ」
「オイラはハッピーだよ」
お、普通に返してくれた。多分、細かいことを気にしない性格なんだろう。
そんなこんなで火竜をシカトしていたら、まわりの女がぎゃーぎゃー騒ぎだした。どうやら失礼な態度を取ったことで反感を買ったらしい。
それに対する火竜の対応は、キザに笑って俺らを許すというものだった。カンに触る奴だな。
「ふぅ。まあ、キミたちも悪気があったわけじゃないんだろう？ちょっと僕の人気が羨ましかっただけなんだよね？」
ぶっ飛ばすぞ、お前。
「そうだ。これを……キミ達にあげよう。僕のサインだ。友達に自慢するといい」
「「いるか、んなもん」」
ナツと二重奏（デュエット）で拒否すると、回りの奴らに突き飛ばされた。
それから火竜は恐らくは魔法で生み出した紫色の焔に乗って、ど

こかへ飛んでいった。去り際に船上パーティーがどうのこうの言ってたが、まあどうでもいいか。

「んだよ、あいつは。うざってぇ野朗だな」

「な。それに、結局イグニールでもねぇし」

そのイグニールってのはなんなんだ？

そう聞こうとしたところで、背後から俺たちに声がかかった。

「あんたたち、さっきはありがとう。おかげで助かったわ」

振り返ると、金髪を横で括った女が、手を上げながらこちらを見下ろしていた。

＊　＊　＊

――ハルジオンの街　食堂――

俺たちに話しかけた女は、ルーシィと名乗った。なんでも、さっきの男に『魅了（チャーム）』とかいう魔法をかけられていたところに俺たちが現れ、それがきっかけで解けたことを感謝しているとか。ちなみに『魅了』ってのは人の心をひきつける魔法なんだと。

んで、今はルーシィのおごりで飯を食っている最中。自己紹介はすでに済ませ、今はルーシィの話を食事しながら聞いていた。

「あたし、実は魔導士なんだ。もっとも、ギルドには入ってないんだけど」

「ギルドってなんだよ」

「ああ、ギルドってのは魔導士の集まる組合でね、仕事や情報を仲介してくれる場所なんだ。魔導士は、ギルドで働かないうちは一人前って言えないの」

「ふーん……」

その後ルーシィはなんか言っていたが、飯に夢中になっていたので聞き流していた。

で、気付けば話題はナツとハッピーに移っていた。

「そういえば、あんたたち誰か探してたみたいだけど……」

「火竜っていうぐらいだから期待してたんだけど、全然違った。てっきりイグニールだと思ったのによ」

「火竜って見た目じゃなかったもんね」

見た目が火竜って……。

「んな人間がいるわけねぇだろうが」

「ん？　イグニールは人間じゃねぇよ。本物の竜（ドラゴン）だ」

「って、街中にいるわけねぇだろ！？」

ペットじゃねぇんだぞ！？

「あ、あはは……。まあ、あたしはもう行くわ。お金はおいてくからゆっくり食べなよね」

そう言ってルーシィは去ろうとするが、このままなんの礼も無しってのは気分が悪い。

うーん……あ、そうだ。

「なあ、ナツ。飯の礼に、ルーシィにさっきもらった『アレ』やろうぜ」

「あ？　……ああ、あれのことか」

提案してみるとナツも気付いたのか、懐をごそごそと探り出す。俺はそれを横目で見つつ、ルーシィを呼び戻した。

「なに？　まだ何か用、あるの？」

「ああ。お前にな――」

そしてナツと二人で目当てのものを差し出し、同時に言った。

「「これやるよ！」」

「いらんわっ！」

ルーシィにはたかれた火竜のサインは、ひらひらと飛んでいった。

＊　＊　＊

――ハルジオンの街　高台――

時間は流れ、今はもうすっかり夜。行く当てもない俺は、街中をぶらぶらしていた。

ナツとハッピーとは、ルーシィが帰った少し後に別れた。あいつらは、まだ飯を食いたかったらしく、追加料理の注文してた。

俺はといえば、いくつかやることがあったので、街の図書館でいろいろ調べ物をした。

その結果――

「異世界、ねぇ……」

ぼんやりとそう呟き、空を仰ぐ。夜空には星々がきらめいていて、こんな気分じゃなければなかなか楽しめそうな景色だった。

……さて。話を戻そう。

図書館で俺が読んだのは、歴史書や地図帳の類だった。そして読み進めていくうちに、この世界が俺の世界ではありえないということが判明した。

そう思い至った理由はもう一つ。図書館にあった『初級魔法入門』という本がそれだ。

こちらも読み進めてみると、どうやら魔法の構造まで異なるらしい。例えば、俺たちの魔法は詠唱を必要とするが、こちらの世界では詠唱がいる魔法なんてほとんどないのだとか。ついでにいえば、魔法はやはり一般化しているそうだ。

「それに、転移魔法もダメだったしな」

試しに俺の国へと転移する魔法をつかってみたが、失敗に終わった。距離が遠すぎるのか、それとも魔力が足りないのかはわからな

いがな。
あと可能性としては、あの未完成の魔法だが、あれも今度は発動すらしなかった。こちらは魔法不足が原因だろう。
――というわけで。俺は、目下もとの世界に帰る手立てを失ったというわけだ。

「……って、冷静に考えてる場合じゃねぇよなぁ。このままこの世界に骨を埋めるなんて、いくらなんでも嫌だぞ」

向こうの世界には、やり残したことも、やりたいこともあるし、会いたいやつだっている。絶対に元の世界に帰る方法を探さねぇとな……。
そんなことを考えながら、ふとすぐ近くの海に目を向けた時だった。

「――ん？　ありゃあ……ハッピーとルーシィ？」

何故か羽が生えているハッピーがルーシィを抱え、船から飛び出していくのが見えた。何やってんだ、あいつら……？
その光景をぼーっと見ていたら……ハッピーの羽が消え、二人（？）いっぺんに海へと落ちていった。

「って、えええええええ！？　何やってんだ、あいつら！」

慌てて地面を靴で踏む。すると、影が、石を投げ込んだ湖のように波打った。

「『杖よ』！」

続けて呪文を詠唱すると、影の中から、木製の俺の身長と同じく

らいの杖が飛び出してきた。
ちなみに、この影をつかった収納術は俺の師匠に教わった、魔法というよりはスキルだ。影を一つの魔具として見ることで、影を物置のように扱うこの術は、なかなかに習得が難しかった。
――っと。今はそんなことはどうでもいい。
俺は杖にまたがり、高らかに叫んだ。

「『杖よ飛べ』！」

声に従うように、俺は空に浮かび、一気に加速を始める。そしてもう少しでたどり着くといったところでルーシィが鍵のようなものを取り出し、それを水面に突き刺した。
続いて、その海面が光り始め、数瞬後に人魚が姿を現した。

「ッ！　召喚魔法――じゃねぇな。こっちの世界では星霊魔法っつったか」

そう呟く間にも距離は縮まり、俺はルーシィとハッピーのもとにたどり着いた。
二人に手を差し伸べながら、呼びかける。

「ルーシィ！　ハッピー！　俺につかまれ！」

「リン！？　なんでここに……っていうか、なんで飛んでんの！？」

「んなもん、後回しだ！　お前が呼び出した人魚、なんかやばそうだぞ！」

「やばそうって……アクエリアス！　あんた、何しようと――」

ルーシィの言葉が終わるよりも早く、人魚は持っていた壺を振りかぶる。
俺は急いで二人を担ぎ上げた。直後、人魚が壺をたたき付けると大津波が起こり、ルーシィたちが抜け出した船が港へと流されていった。

「……あのままだったら、お前も流されてたな」

「あい。ルーシィもしかして、ダメ主人？」

「うっさい！　アクエリアス、なんであたしまで流そうとしてんのよ！」

「フン。お前を狙ったんだが……まあいい。これからしばらくは呼ぶなよ。一週間、彼氏と旅行に行く。彼氏とな」

「二回言うな！」

さんざん言いたい放題言ったアクエリアスは、すうっと消えていった。役目を果たしたら帰るってのは、召喚魔法と一緒だな。
まあ、それはおいといて。

「んで、お前らはなにやってんだよ。それに、ナツは？」

「そうだ、聞いてよ！　あの火竜ってやつ、奴隷商人だったのよ！」

なるほど……。こいつ、さては騙されやがったな。

「んじゃあ、ナツは？」

「ナツは今、あの船に……ああっ！　忘れてた！　ちょっとリン、急いであの船に向かって！」

「わーった！　わーったから、首を揺するな！」

急かすルーシィをなだめながら、今度は船に向かって杖を飛ばす。十数秒でたどり着き、俺たちは船内へと降り立った。中ではナツがちょうど船員をぶっ飛ばし、名乗りをあげているところだった。

「オレは『妖精の尻尾（フェアリーテイル）』のナツだ！　おめぇなんか見たことねぇ！」

「え……えぇ！？　ナツが『妖精の尻尾』の魔導士！？」

……うーん。さっぱり流れがつかめない。

なんだよ、『妖精の尻尾』って。

「まあ、いっか。大人しく見学……ってわけにもいかねぇな」

振り返ると、殺気だった男たちが数人いた。こいつらは、俺の相手がしたいらしい。

……上等だよ。

「ディグ・リル、フル・ミル、カオスフリウス」

始動キーと呼ばれる、魔法の開始合図のような呪文を唱え、それから新たに詠唱する。

その間に男たちが向かってくるが、もう遅い！

「『光の精霊１１柱。集いきたりて敵を討て――魔法の射手・連弾・光の１１矢』！」

その言葉と共に俺の掌からいくつもの光条が飛び出し、全員まとめて吹き飛ばした。
――さってと。これでお掃除は終わりだ。

「ナツ。そっちも終わった……」

振り返って、絶句。
奴隷商人の連中を倒してるところまではいいんだが……。

「オラオラオラオラァあああああああああああああああ！」

「いくら火『竜』って言っても、やりすぎよぉおおおおおおおおおおおお！」

いつのまにかナツは戦場を船から港に移していて、暴れまわっていた（もしくは、港を破壊していた）。あの振り回してる大木かなんかはマストだろうか？
時折ナツが炎を吐いているように見えるのは……気のせいだよな。

「って、んな現実逃避してる場合じゃねぇな。――おい、ナツ！暴れすぎだ馬鹿！」

「オラオラァッ！」

聞いちゃいねぇ。

『こ、この騒ぎはなにごとかねーっ！』

「ん？」

がちゃがちゃとやかましい音が聞こえると思ったら、鎧を着込んだ連中が押し寄せて来ていた。
あれは……軍隊だな。
「こりゃ、捕まったら面倒だな」
手に持っていた杖に再びまたがり、空に浮かぶ。それから一気に飛び出そうとしたところで、ナツから声がかかった。
「リン！　お前も来いよ！」
「ああ？　どこにだよ？」
俺がそう訊くと、ナツは笑ってこう言った。
「『妖精の尻尾（オレたちのギルド）』だっ！」
「……」
そうか……『妖精の尻尾』って、こいつのギルドだったのか……。
考える。俺は今、もとの世界に帰りたい。でも、帰る術はない。
おまけに、行く当てもない。
そんで――
「……よし！　んじゃあ、行ってやるよ！」
そんで――こいつらといるのは楽しそうだ。
月夜が照らす、ハルジオンの街。

その街中を、火竜と羽猫と美少女と――魔法使いが駆けて行った。

第一話　火竜と羽猫と美少女と（後書き）

ご意見・ご感想、お待ちしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2074n/

ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬ　～異世界から来た魔導士～

2010年10月10日16時43分発行